

コロナ禍に心痛め

「対応に役立てて」と寄付

新型コロナウイルス感染症の拡大で、多くの市民や事業所からマスクなどの支援が市に寄せられています。その一人、コロナ禍に心を痛め「地元に貢献したい」と寄付を届けてくれた市在住のアーティスト社長・渥美公喜さん（37歳）にその思いを聞きました。

不眠不休の医療従事者に「他人事ではない」

コロナ禍が全国的に広がり始めた2月頃。病院などで医師や看護師が奮闘する様子を伝えるニュー

スに動揺しました。

「姉2人が看護師なんです。日夜、休まず頑張る医療従事者の姿を見て、他人事のように思えませんでした」。

こんな衝動に駆られたのは、



あつみ こうき 渥美 公喜さん（太秦東が丘）

今回が初めてではありませんでした。4年前の4月。熊本地震の1週間後には、乳幼児用のおむつや歯ブラシ、飲料水やブルーシートをトラックとワンボックスカーに積み込み、約750km離れた阿蘇市に一昼夜かけて届けました。

従業員の姿が決意を後押し

渥美さんは中学校を卒業すると、建設用の鉄筋を扱う仕事に就き、19歳で独立。8年前に会社を設立しましたが、山あり谷ありの経営でした。

12年前の世界的な金融危機のときは現場の仕事がなくなりました。今回もキャンセルが相次ぎましたが、その度に支えてくれたのは従業員だったといいます。

「自粛生活が続く中、工事現場へ行ってもらうのはつらかったのですが、前を向いて頑張ってくれており、『何かしなければ』という私



渥美さんを後押ししてくれた従業員たち

「将来への対策に使うてもらえたら」

の思いを後押ししてくれました。

子ども4人の父親。「休校中は外で遊ぶべし、自宅で過ごすことが多かった」というわが子の姿に、不足していた小児用マスクなど物資の提供も考えましたが、「将来に向けた対策に使ってもらえたら」と500万円を寄付することにしたそうです。

寄付額を聞いて最初はびっくりしたという経理担当の妻・麻美さんも夫の心意気に快諾。渥美さんは「一日も早く通常の生活に戻ってほしい」とコロナ禍の収束を願っています。

